



万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

ご挨拶

慶應義塾大学医学部
医学部長・外科教授

北島 政樹



2005年8月、南アフリカ連邦共和国のダーバンで第41回万国外科学会が、Prof.Siewert会長、LOC会長Prof.Pillayのもと開催され、成功裡に終わった。約1500名の事前登録があり、日本からは米国に次いで95名であった。会期中は外務省通達の「治安に十分注意して渡航する必要がある地区」という情報が飛び交ったが、通達通りの治安の悪さを実体験した会員もいたようである。しかし、一方では学会でもないと中々いけない国であり、サファリを満喫し、貴重な経験をした人もいる。

このような数々の思い出と共に今でも学会について語ることがあるが、光陰矢のごとし、早五ヶ月が過ぎ、月日の経つ早さに驚いている。

さて、学会終了後5ヶ月間にモントリオールの学会の準備は着々と進んでおり、3月9日から11日のダボスにおける理事会、プログラム委員会に関するE-mailの交信が頻繁に行なわれている。まず、ISSはご存知の通り、IntegratedとParticipated Societyの集合体であり、それぞれの分配金の問題やISUCRS(International Society of University of Colo-Rctal Surgery)の参加問題、あるいは各学会のプログラムの試案の作成で小生とISDS会長のProf. LO.やプログラム委員長、Prof. Fried及び事務局とのやりとりが行なわれている。小生も日本から多くの人々が司会者や演者としてモントリオールの学会に参加出来るように、日本人中心のシンポジウム、ワークショップ案をLOC会長のProf. BeawchampあるいはProf. Friedと意見の交換をし続けている。ISDSとの調整は現在、小生がISS-PresidentとISDS-Vice Presidentを兼務しているので非常にスムーズに行なわれているのが現状である。

International Surgical Week 2011 の成功に向けて

ISS/SIC Japan Chapter,
National Delegate
帝京大学医学部名誉教授・客員教授
山川 達郎



ISS/SIC におけるISS/SIC Japan Chapterの位置付け

DurbanでのISW 2005の期間中に開催されたBusiness Meetingにおいて、それまでPresidentであったProfessor J. Rüdiger Siewertが退任されて、慶應義塾大学 北島政樹教授がPresidentにご就任になられ、そして2007年のMontreal Meetingを主催されることが決定したこととISW2011が横浜においては開催されることが本決まりになったことを前回号で報告いたしました。

本会の歴代会長のリストを見ますと、一世を風靡した有名な外科医の名前が列ねられ、本会の素晴らしい歴史と伝統を知ることができます。第1回ISWは1905年、あの有名なProfessor T. Kocherを会長としてBrusselで開催されています。以降、ISWは世界各地で開催されてきたわけですが、しかし、その間Asiaで開催されたのは、英國のSir Thomas Holmes-Sellorsを会長に日本で開催されたISW 1977とGermanyのProfessor T. Trede

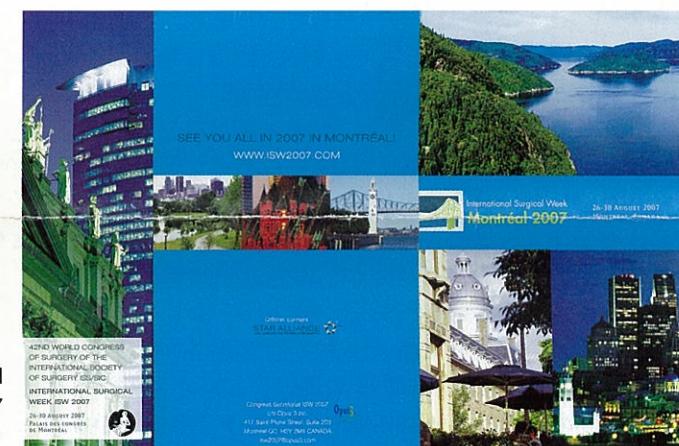
さらに、2011年の横浜におけるISS/SIC開催が決定した事により、昨年、ISS元会長・出月康夫先生、元理事・比企能樹先生、日本支部長兼副会長・山川達郎先生と共に日本開催時の対応について意見の交換を行なった。

又、1月に入り、チューリッヒでDr. Harder, Dr. Sarr及びMr. Bertschiの3人で小会議が行なわれ、永年のIAES間の懸案事項について議論が行なわれた。特にIAESへの分配金及びPeter Heiman Lectureの謝金予算、Opening Ceremonyの方法、MembershipやRegistration fee及びWorld Journal of Surgeryなどについて意見の交換があった。

さて、水面下ではモントリオールの学会準備、あるいはISS自身の将来構想が着々と進んでいる中で、日本がISSにおいて強い立場で意見を主張し、また重要なポジションにつくには日本支部会の充実、特に会員数の増加と考えている。

昨年度は、山川支部長のご努力で日本会員数が多数増員し、理事会、総会で大きな評価を受けたが、今後も会員と参加していただく事を期待している。

日本の若い外科医がISSの場で優れた発表の討論をし、あるいは世界の指導的立場にある外科医と交流が出来るよう微力ながら会長として努力する所存であるので、ご支援ご指導をお願いしたい。



International Surgical Week Montreal 2007
パンフレット

を会長としてHong Kongで開催されたISW1993の2回にすぎません。またこれまで、アジア人として会長を勤められたのは、Hamburgで開催されたISW 1983の故Professor Tan Sri G. B.Ong (Hong Kong)とLisbonで開催されたISW 1995の東京大学名誉教授 出月康夫先生のお2人のみであります。したがって今回選出された北島政樹教授はアジア人としては3人目のISS/SICのPresidentということになるわけで、ISS/SIC日本支部は、大変誇りに感じると同時に、重く受け止めなければならない出来事であると心を引き締めている次第です。

ISW 2007 と ISW2011の成功に向けて

このたびの北島政樹教授がPresidentに選出されてISW2007を主催されることが決定し、かつISW2011開催国に日本がスムースに選出された理由としては、(1)ISS/SIC 日本支部は、出月康夫教授がPresidentを勤められたAcapulcoでのISW1997以降、一貫してISW招致運動を展開してきたこと、(2)Presidentである北島政樹教授、Past Presidentの出月康夫名誉教授ならびPast Executive Councilorである比企能樹名誉教授らのISS/SICでのご功績、(3)会員諸先生方の日頃のご精進の成果がWorld J. Surgeryを介して世界的にも認められつつあることと (4)会員の急激な増加などが挙げられるものと思います。ISS/SIC日本支部会員にとって、このようなまたとない機会に恵まれたことを誇りに、これらISW 2007とISW2011の成功に向けて最善を尽くす必要があります。

北島政樹教授のPresidentとしての任期はMontreal Meeting終了までの2年間（2005-2007）で、そのあと慣例により2年間Past Presidentとしての任

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区溝口3-8-3
帝京大学医学部附属溝口病院外科
TEL : 044-844-3333(内線3223) FAX : 044-844-3222
発行者：山川 達郎
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・
村田宣夫(帝京大学溝口病院外科)
E-mail : nmurata@med.teikyo-u.ac.jp
印刷：株式会社 dig TEL:03-3551-3060
年2回発行1995年4月創刊

期がありますが、2009年のAdelaide Meetingで任期満了となられます。したがって本邦で開催されるISW2011は、ISW1977の時と同じように外方がpresidentを勤められ、日本支部としてLocal Organizing Committeeを結成して、その中からChairmanを選出して学会を運営することが必要となります。この慣わしはISS/SICのConstitutionに決められており、Montreal Meetingにみるごとく、ISWのPresidentおよびVice presidentと開催国はISS/SICのExecutive Committeeで決定されます。またProgram Committeeは、President of the Society、President of the Congress、Secretary General、Editor-in-Chief of World J of Surgery、Chairman of Local Organizing Committeeに加えて、Integrated SocietiesであるInternational Association of Endocrine Surgeons (IAES)、International Association for the Surgery of Trauma and Surgical Intensive Care (IATSIC)、Breast Surgery International (BSI)とInternational Association for Surgical Metabolism and Nutrition (IASMEN)から8～10人の委員を選出して結成され、そこで討議をつくして最終的なプログラムが決定されます。すなわちシンポジアムのテーマの決定から演題の募集まですべてをISS/SICが行い、提出された演題は各国に割り当てられた査読委員とプログラム委員会委員が厳しく審査して採否を決定、最終プログラムを決定する仕組みになっております。したがって開催国はISWの運営のみを担うことになるわけです。次回のISW2007の開催国であ

るCanada Chapterは、ISS/SICの計画に基付き準備を進めることになりますので、シンポジアムのテーマなどはまだ決められておりませんが、すでに会場も決定され、その準備が着々と進められております。日本支部が横浜を2011年の開催地に決定して、すでに承認を得ておりますのも、数年前、招致運動に先立ち行われたISS/SICの開催地のSite Inspectionの結果が、横浜に圧倒的な支持があったことによります。

これだけの伝統のある国際学会を行うことは実際、並大抵のことではないことは明白です。本格的な準備はMontrealでのISW2007後から始まるわけですが、日本支部会は、この辺で役員を全面的に改選し、若い役員諸氏による新体制を築き、少しづつ準備をしていく必要性があると考えています。そのためにも会員になるに十分な資格を持つ若い方々をもつともっとご推薦いただいて会員を増やす運動も続けていく必要があります。また伝統あるこのISWの雰囲気にも慣れていただく必要がありますので、MontrealでのISW2007は、ことに北島政樹教授の元に行われる日本支部会にとっても重要な会議でありますから尚更のことですが、このMontreal MeetingとAdelaideでのISW 2009には、できるだけ多くの若い日本支部会員の先生方にご出席いただきたいと願っています。

ISW2007、ISW2011の成功は、会員の結束に委ねられています。ご協力を心よりお願い申し上げます。



東京大学名誉教授
南千住病院名誉院長
出月 康夫

この度、万国外科学会（SIC/ISS）の名誉会員に推挙されましたことは身に余る光榮なことと感動いたしております。これも一重に本会の北島会長、比企理事、山川日本支部会長はじめ日本部会の会員の皆様の暖かいご支援の賜物と肝に銘じております。

私が万国外科学会に入会致しましたのは1981年ですが、この会のWorld Congressに初めて参加したのは1977年京都での第27回の時でした。私の東大第2外科の大先輩であった日本医大の齊藤渕先生のお説を受けたことだったと記憶しております。この時に何について発表したかは記憶しておりませんが、当時は米国留学から帰国して未だそれ程年月も経ていませんでしたので、英語は今より多少自信を持っていましたように記憶しています。大変に格式が高く世界各国の外科のリーダーが参集する学会と聞いておりましたので、その後は、1981年のモントリオール、1985年のパリ、1989年のトロント、1991年のストックホルム、1993年の香港、1995年の里斯ボン、1997年のアカプルコ、1999年のウィーン、2001年のブリッセル、2005年のダーバンとほとんど欠かさずにWorld Congressに演題を出して参加してきました。1991年からは九大の中山文夫教授の後を受けて本部の理事会の一員となり、その後役員会にも出席するようになりました。CouncillorとなるについてはCICDの長尾房大先生、青木照明先生などのお力添えがあったと伺っております。その後President-Electを経て、1995年から1997年まで日本からは初めての本会のPresidentをつとめさせて頂いたことは本当に光榮なことでした。さらに本会への参加を通じて世界各国の外科のリーダーの先生方の知遇を得ることが出来たことは、私にとって誠に幸いなことでした。本会の今日の隆盛の基礎を築かれたAllogöwer先生（スイス）をはじめNyhus先生（米国）Rüedi先生（スイス）、Thompkins先生（米国）Wells先生（米国）、

出月康夫先生 名誉会長に推戴

出月康夫東大名誉教授がこの度、万国外科学会の名誉会員に推戴されました。
ご多忙の中、出月先生にご挨拶文を書いて頂きました。

Farnebo先生（スエーデン）、Lezoche先生（イタリア）、Cervantes先生（メキシコ）、Teixeira先生（ポルトガル）、Sandor先生（ハンガリー）、Psauwasdi先生（タイ）、Brown先生（オーストラリア）、Carter先生（英国）、それに事務局長のBertschi氏、Stolz氏など実際に多くの方々にお世話になりました。

これらの方々にもあらためて御礼を申し上げます。

参加させていただいたそれぞれのWorld Congressには、それぞれ忘れ難い思い出がありますが、本会のCouncillor、President-elect、Presidentをつとめさせていただいた9年間の記憶はとくに鮮明に残っています。この間、1977年京都で行われた第27回のWorld Congressで大変に御苦労をいただいた齊藤渕先生（日本医大）、石川浩一先生（東大）のお二方に本会の名誉会員となって頂いたことは非常に嬉しいことでした。

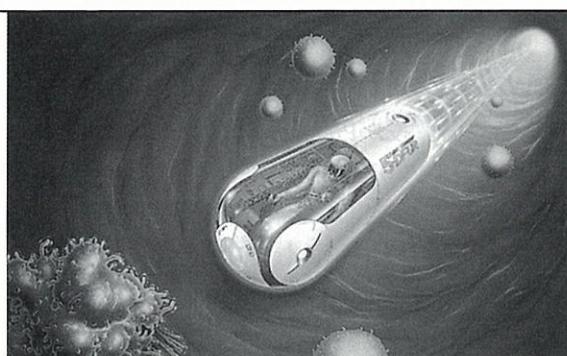
日本部会の山川支部長、Councillorの比企先生、会長の北島先生などの御盡力によって会員が増え、今や米国に次いで第2番目の会員数を擁するまでになりました。

World Congressにおける一般演題の採択率は連続して最上位を誇っており、また機関誌であるWorld Journal of Surgeryへの投稿数採択率でもわが国はトップクラスにあります。Editorial Boardにもわが国から多数の先生方が参画しておられるることは心強い限りで、同誌のimpact factorも英文外科誌の中では急上昇していることは御承知の通りです。

永年に亘る念願であったWorld Congressの日本説明も、北島会長、山川支部長、比企前理事らをはじめ会員の皆様の御盡力によって2011年に横浜で実現することが決まりました。

今やISS/SICは、わが国抜きには考えられない時代になりました。

若い先生方の活躍の場として、本会が益々活用され、世界の医学、医療の進歩に益々貢献することを願っております。



抗悪性腫瘍剤

劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品^(注)

フルリロン[®] ドキシフルリジンカプセル
FURTULON[®] DOKSIFURILIGAN CAPSULE
注)注意—医師等の処方せんにより使用すること

薬価基準収載

100

カプセル 200

※効能・効果、用法・用量、警告、
禁忌を含む使用上の注意等は
製品添付文書をご参照ください。
<http://www.chugai-pharm.co.jp>

製造販売元 CHUGAI 中外製薬株式会社
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1
Roche ロシュ グループ

2006年2月作成



これまで、これからも、 「患者思考」

患者さんのことを、自分のことのように考えると、見えてくるものがあります。いま満たされていない患者さんのニーズに応えるために何ができるか。何を優先すべきか。私たちヤンセンファーマは、その最善の答えを導いていくため、これからも挑戦を続けていきます。

ヤンセンファーマは、CNS（中枢神経系）、真菌症、鎮痛・麻酔、がん領域のリーディングカンパニーを目指す、「ジョンソン・エンド・ジョンソン」グループの製薬会社です。

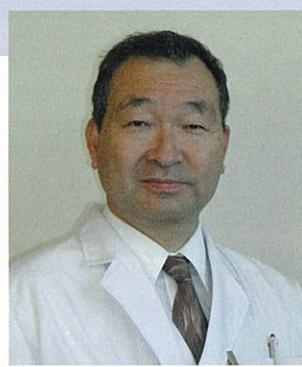
ヤンセン ファーマ株式会社

〒101-0065 東京都千代田区西神田 3-5-2 <http://www.janssen.co.jp>

特別寄稿

国際学会の思い出

東北大大学院医学系研究科
生体調節外科学教授
佐々木 嶽



昔は留学先からの発表を除けば海外で発表することは特別なことで、教室からは年に数名程度が教授のお供で出かけたりしていたように記憶している。その当時の通過レートは1ドル360円。国際学会参加費用は今以上に高額であった。その後しばらくして自由通貨制度になり、国際学会への日本人の発表も増え始めた。現在の教室では、いつも誰かが国際学会に参加しており、欧米諸国は昔ほど遠い存在ではなくなっている。現実的には、国内の学会も増えて充実してきており、また、メディアなどが発達し海外情報が多く得られるため重要な国際学会には限定して参加・発表をすることが多くなっている。国際学会への参加者数が増えて来た要因としては、若い人の英語表現力が向上し、我が国の医学研究が欧米に追いつきある部分では追い越している分野も有ることや国際学会が増えた事なども大きな理由であろう。といっても、英語が母国語でない日本人医師にとっては誰もが少しの困難もなく学会発表や質疑応答ができるとは限らないのが現実。私自身は日本語での発表原稿を英語に置き換えるときに旨くいかない事も少なくない。どうもなまじか日本語が出来たためであろうか、表現すべき内容が論理的に不明確になってしまっていることが英語で表現しにくい原因になっていると気づくことがある。国際学会では公用語が英語である事がほとんどであるので、英語の論理性を利用して発表の筋道を考えるのは、科学的・論理的思考を深める事に役立つのではないかと思う。そして、少ない予算と忙しさの中で出来るだけ国際学会に参加しようと考え、また、教室の若い外科医には積極的に参加を勧めている。

国際学会では様々な外国人の外科医に接することができ、その中には素晴らしい人物と会う機会が得られるのも大きなことと思う。以前、サンジエゴでDDW/AGA/SSATが開催された時は、ヨットのレースで4年に一度開催される世界的に有名なアメリカズカップ戦がこの土地の沖合で開催されており学会と同時にこの世界的なイベントを現地で楽しむことができると期待された。しかし、チーム・ニュージーランドが米国のデニス・コナー率いる米国チームを4連覇して優勝、学会開催日に試合は終了となってしまった。かろうじてコナーに合う事が出来、ヨットグッズを購入しその品にサインをして頂いたことは幸いであった。そのような訳で、特にその時は学会に集中出来たように思う。DDWに含まれる同時開催のSSATのシンポジウムがあり、Crohn病の外科治療を取り上げられ、クリブランド・クリ

ニックのFazio教授などの発表に加えて新進のシカゴ大学Michelassi教授が新しい術式を発表していた。小生は、丁度、様々なCrohn病の病変を自分で数多く経験し、従来のSXPL(strictureplasty)では対応出来ない病変が有るためにこれをなんとかする方法はないものかと考えていた時だけに、Michelassiの発表(isoperistaltic side-to-side enteroenterostomy)は私に衝撃を与えた。早速、シンポジウムの発表が終了した後にフロアで彼に質問し、詳しく知りたいのでビデオを送るよう依頼をした。これは快くOKの返事をくれたが、それまでの経験では様々な場面で快諾を得ても実際に送ってくれる医師は少なかったので、帰国後は半ば諦めかけていた。と、その矢先に、2ヶ月ほどして彼から新しいSXPLのビデオの小包が小生に届いた。何度もビデオを繰り返し再生して検討し、この術式を必要とする実際の症例に彼の考案した術式が私の施設で行われ症例を重ねる事になった。それから暫くして、彼が日本に来る事になるのを知り仙台まで七夕観光ついでに来て戴き講演をお願いしたことがある。改めてビデオのお礼を述べ何度も見て勉強した事を彼に告げる事が出来た。彼の新しい術式の発表は、Crohn病に対する新しい外科治療の戦略形成の緒となつばかりか、小生も触発されてDouble Heineke-Mikuliczという新しい狭窄形成術を同じ雑誌に発表しこれらの術式が欧米の専門教科書にも引用されるきっかけを作る事になった。以後、彼はシカゴ大学からニューヨークのCornell大学に大きな外科チームのChairmanとして移った。お互いに年を重ねたが、幾度か学会でもお会いし、クリスマスカードを戴いたり時々はメールでも意見交換をする仲となっている。最近はこの術式に関して国際的な調査協力を彼自身から依頼され、その成果が共同研究成果として論文化される予定である。このような出会いと友情を得ることができたのは、国際学会に参加して来たことによるお陰であり、私の大きな宝物の一つとなっている。

若い外科医が今後さらに国際学会に参加する機会が増えると思われるが、国際的な新知見との出会いや人との出会いは数限りなく有るであろう。積極的に参加し交流をし、数多くの経験を積んで奥深さのある外科医として育って欲しいと願っている。

古くは、九州大学第一外学教室の三宅 速教授が欧州での万国外科学会に参加したおり、客船で移動中AINSHUTAINと親交を結ぶ機会があり、これを大切にしたAINSHUTAINが日本に始めて来た時にはわざわざ九州から入国したと聞く。最近、小生は小倉市で日本腹部救急医学会が開催されたおり、近くの門司港に足を伸ばしたことがある。門司駅に降りると目の前に当時の門司三井俱楽部の商館が移転され保存されていたので、すかさず好奇心から見学した。大きな木造建築の2階にはAINSHUTAINが滞在した部屋があってその展示品の中に彼が弾いたバイオリンと共にAINSHUTAINから三宅先生宛の手紙を偶然に見つけることができた。そして、国際学会と外科医の歴史に自分の経験を重ね合わせて思いを馳せる事が出来、外科をやっていてよかったと思った次第である。

会員動向

(2006年2月) (2005年4月)

会員数

内訳	アクティブメンバー	304名	246名
	シニアメンバー	30名	27名
	名誉会員	2名	1名

・入会 伊藤康弘 医療法人神甲会隈病院
日比八束 藤田保健衛生大学医学部
他に現在申請中 25名

・退会 奥井勝二 帝京平成大学
小林國男 森山内科クリニック
酒井 滋 中川原儀三
中川原儀三 原田種一

瀬田孝一 ご逝去

2006年 予算案 (2006年1月1日～12月31日)

日本円の部		
予算額	備考	
I 収入の部		
会費	1,200,000 \$ 通帳→¥通帳預替 (us\$1.00=¥120 として)	
広告掲載料	400,000	
雑収入	0	
利息	0	
0		
当期合計	1,600,000	
前年繰越金	824,011	
収入合計	2,424,011	
II 支出の部		
会議費	300,000 2回分	
通信費	200,000	
印刷費	450,000 ニュースター:2回発行	
文具費	50,000	
交通費	150,000 出張旅費	
人件費	150,000	
他誌広告費	0	
謝礼	80,000	
雜費	10,000	
予備費	60,000	
支出合計	1,450,000	
収支残高	974,011	
(2007年 繰越金)		

US \$ の部		
予算額	備考	
収入の部		
会費	12,000.00 日本支部会運営費 (為替経費手数料引後)	
利息	0.00	
繰越金	8,426.69	
収入合計	20,426.69	
支出の部		
日本円へ預替	10,000.00 日本円の部、会費収入へ (us\$1.00=¥120 として)	
スイス本部寄付	1,500.00	
支出合計	11,500.00 13,500.00	
2007年 繰越金	8,926.69	

2005年 収支決算書 (2005年1月1日～12月31日)

日本円の部		
予算額	決算額	備考
I 収入の部		
会費	1,050,000 1,337,760 \$ 通帳→¥通帳預替	
広告掲載料	400,000 300,000	
雑収入	0 31500	
利息	0 2	
当期合計	1,450,000 1,669,262	
前年繰越金	498,774 498,774	
収入合計	1,948,774 2,168,036	
II 支出の部		
会議費	300,000 248,005 2回分	
通信費	200,000 214,485	
印刷費	450,000 554,925 ニュースター:2回発行	
文具費	50,000 46,406	
交通費	150,000 43,410 出張旅費	
人件費	150,000 140,000	
他誌広告費	0 0	
謝礼	80,000 21,600	
雑費	10,000 75,294	
予備費	60,000 0	
支出合計	1,450,000 1,344,025	
収支残高	498,774 824,011	
(2006年 繰越金)		

US \$ の部		
予算額	決算額	備考
収入の部		
会費	11,000.00 7,603.20 日本支部会運営費 (為替経費手数料引後)	
利息	0.00 32.08	
繰越金	14,291.41 14,291.41	
収入合計	25,291.41 21,926.69	
支出の部		
日本円へ預替	10,000.00 12,000.00 日本円の部、会費収入へ	
スイス本部寄付	1,000.00 1,500.00	
支出合計	11,000.00 13,500.00	
2006年 繰越金	14,291.41 8,426.69	

2005年(平成17年) 残高 日本円 824,011 円

米ドル 8,426.69 us \$

ISS/SIC 万国外科学会
日本支部

監事 四中 雅夫

特別寄稿

国際学会、万国外科学会の思い出

名古屋大学大学院医学系研究科
病態制御外科学教授
中尾昭公



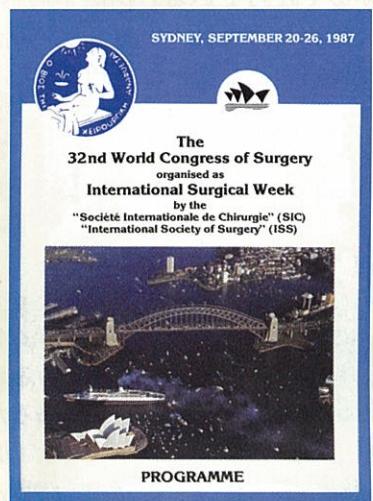
私がはじめて国際学会で発表したのは卒後9年目の1982年、第7回国際消化器外科学会（CICD, ISDS）が慈恵医大の故長尾房大教授が会長として京王プラザホテル（東京）で開催された時であります。当時、抗血栓性門脈バイパス用カテーテル（アンスロン）を開発し、それを用いた門脈カテーテルバイパス法による腫瘍に対する門脈合併腫全摘術についてムービーセッションで発表いたしました。この手術映画はそれなりに反響があり、しばらくして当時九州大学第一外科の中山文夫教授から万国外科学会（SIC, ISS）に入会しないかとのお誘いをうけ、御推薦を賜り入会いたしました。私のISSの最初の発表は1987年のシドニーで開催された第32回世界大会でした。その時の発表は腫瘍部腫全摘34例の体尾部への癌進展に関してHE染色に免疫染色も加えての検討をポスター発表いたしました。ポスター発表のため妻と友人と観光を楽しむ日が多く、学会最終日のFarewell Banquetも欠席し、すでにその時はタイを経由して帰国の途中であります。しかし、そのBanquetの席上Poster Prizeの発表があり、私の発表がその賞に選ばれ表彰されましたが、私は不在で「ナカオ」の名前を聞かれた当時大阪大学第一外科の中尾量保先生が代理で受け取って下さい、帰国されてからご連絡をいただき、届けてくださいました。Poster Prizeは賞状の他に賞金が与えられ小切手が同封されていました。大変な喜びで小切

手は換金もせず現在も記念に所持しています。この時は日本からの参加も多かったと記憶しています。今回この寄稿の御依頼を賜りましたのでこのことを思い出し、その時のプログラムの表紙を掲載させていただきました。それ以後できる限りISSには参加し、Banquetには出席するようにしています。またこの時の発表内容をAnnals of Surgeryに投稿したところreviseもなくacceptされ二重の喜びを得ました。

私は消化器癌のなかでも腫瘍を中心とした臨床と研究に携わってきました。消化器外科に関する学会としてACS, ISS, ISDS, IHPBA, IASGなどの多くの学会に関係し参加してきましたがACSと違ってInternationalのつく学会の良さは生で世界各国の専門家と語り合え、不自由な英語をお互いに理解し合おうという努力が会場にあることです。これらの学会を通して多くの友人を世界各地に得ることができました。はじめての海外発表経験はInternationalとつく学会から始められることをお勧めします。国際学会で発表した内容は是非とも英文誌に投稿される習慣をつけることが大切で、ISSは機関誌としてWorld Journal of Surgeryを刊行していますので是非投稿されることをお勧めします。

昨年は南アフリカ・ダーバンのISSに教室員3人と参加しました。次回2007年はモントリオール、2011年は日本（横浜）での開催が決定されており今から楽しみにしております。日本人はSocial Programに参加する方が少ないようですが国際学会では是非ともOpening CeremonyとFarewell Banquetには出席して下さい。得るものが多いと思います。

第32回世界大会
プログラムの表紙



第20回 万国外科学会（ISS/SIC）日本支部総会 議事録

2005年11月9日（木）午前7時～8時
高輪プリンスホテル さくらタワー

出席者24名

出月康夫	海野倫明	沖永功太	川原田嘉文	北川雄光	北島政樹
木村 理	小坂健夫	佐々木巖	白日高歩	杉本真樹	関川敬義
高見 博	田尻 孝	手取屋岳夫	原口義座	比企能樹	丸田守人
宮島伸宜	村尾佳則	村田宣夫	森脇義弘	矢永勝彦	山川達郎

(敬称略、五十音順)

議事録

- 1 支部長ご挨拶 山川達郎先生
- 2 会長ご挨拶 北島政樹先生
- 3 前回議事録確認
- 4 ダーバンでの学術集会の報告（山川達郎支部長）：
 - (ア) 約3500名の参加があった。
 - (イ) ISW2004中止に伴い、今回出月先生が名誉会員に推戴された。
 - (ウ) 北島先生がPresidentに選ばれた。
 - (エ) 年会費が185ドルに値上げされた。
 - (オ) Active memberの申請はNational Delegateを通じて行うように規則が改定された。
 - (カ) National Delegateの任期は4年とされた。
 - (キ) 山川達郎先生がVice Presidentに選ばれた。
 - (ク) Professor SarrがPresident Electになった。
- 5 北島政樹先生より：2011年の万国外科学会は横浜で行う予定。パシフィコ横浜を仮想した。2013年はイタリアの可能性が高い（未定）。
- 6 高見博先生より：IAESについてはメーンの学会が

ISS学術集会であって、毎年IAES関連の医師がISSに10名位ずつ入会していると報告があった。

- 7 出月康夫先生より：名誉会員に推戴された件についてのご挨拶がありました。
- 8 国際学会関連で、北島政樹先生より次回第7回国際胃癌学会は2007年ブラジル・サンパウロで開催されることの報告があった。2008年に国際内視鏡外科学会が北野正剛教授を会長として開催されることが報告された。アジア内視鏡外科学会は田尻孝教授を会長として2008年の国際内視鏡外科学会と併催されることも報告された。
- 9 比企能樹先生、山川達郎先生より、2011年日本開催に向けて、皆様のご協力をお願いしたい旨の発言があった。 (文責：村田宣夫)



プロトンポンプ・インヒビター

指定医薬品 処方せん医薬品⁽¹⁾ (ランソラゾール口腔内崩壊錠) ■薬価基準:収載

タケプロン[®] OD錠 15・30

■効能・効果、用法・用量、禁忌・使用上の注意の詳細等については、添付文書をご参照ください。

【資料請求先】 大阪市中央区道修町3-1-8 〒541-0045
塩野義製薬株式会社 医薬情報センター
電話0120-956-734

製造販売元
シオノギ製薬
<http://www.shionogi.co.jp/med/>

